

2020年10月4日

わたしは生きる

年間第27主日では「ぶどう園のたとえ」が読まれます。ぶどうといえば、聖書の中では「わたしはまことのぶどうの木／あなたがたはその枝である」（ヨハネ15・1、5）が思い浮かびます。改めて、身近な人とのつながり、そして神さまとのつながりについて考えてみましょう。

今日のマタイ福音書における「ぶどう園のたとえ」（マタ21・33-43）話では、——**救いの歴史**——が表されていると考えることができます。旧約聖書の預言者たちからはじまり、父の独り子であるイエスが地上に遣<つか>わされ、十字架上で死んで復活するという壮大な神の救いの計画がわずかたった10節で説明されます。

「ある家の主人がぶどう園を作り、...これを農夫たちに貸して旅に出た。」
(マタ21・33)

収穫の 때가近づき、主人は自分の僕たち（預言者）を農夫たちのもとへ送りますが無残にも僕は殺されてしまいます（マタ21・35）。しかし主人はあきらめません。前よりも多くの僕を農夫たちのもとへ送り、収穫の時に備えますが、残念ながら結果は変わりません。すでに多くの僕たちが殺されてしまったのですから、このように危険きわまりないぶどう園にどうして新たに人を送ることができるでしょうか。ところがぶどう園の主人はあえて危険を冒して自分の息子を送ることを決めます。

「わたしの息子なら敬ってくれるだろう。」（マタ21・37）

案の定、農夫たちは主人の息子をぶどう園の外で殺害してしまいます。これはイエスさまがエルサレムの城外で十字架にかけられたことを伝えている、という読み方もあります。いずれにしても、たとえ話が強調しているのは、農夫たちの一貫した悪い行い、無慈悲、かたくなな心です。これらはわたしたちの人間社会の中にも見いだされるものと言ってよいでしょう。そして、もしこのたとえ話の結びにあるイエスさまのことばに目を留めなければ、このたとえ話はなんだか悲しいお話であったということにもなりかねません。ですから次の詩編118のことばは大切です。

「家造りの捨てた石が もっとも大切な石となった。
これは神のわざ、人の目には不思議なこと。
今日こそ、神が造られた日、この日をともに喜び祝おう。

わたしは死なず、わたしは生きる、
神のわざを告げるために。神は わたしを責められたのに、
死に渡そうとはされなかった。」（詩編118・22-24、17-18）

神の救いの計画は、わたしたち人間社会の罪や悪でさえも、神の愛といつくしみを知る機会へと変えてくださいます。わたしたちが神と隣人によって支えられ、生かされていることに気づくよう促します。すべてが失敗に終わったと思われるような時でさえも「隅<すみ>の親石」（マタ21・42）は残されているのです。たとえ辛いことや、落ち込むことがあっても「わたしは死なず、わたしは生きる」と神に信頼を置いた詩編作者に心を合わせて、この一週間を新しい心ではじめることができますように。

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。
感謝を込めて祈りと願いをささげ、
求めているものを神に打ち明けなさい。」
（フィリピ4・6）

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第27主日聖書朗読箇所：

- ① イザヤ5・1-7
—答唱詩編—詩編80より
- ② フィリピ書4・6-9
- ③ マタイ21・33-43